

定期巡回・随時対応型訪問介護看護会議 会議録

令和6年7月19日金曜日 14:00~15:30 於:株式会社ゆりかご

定期巡回・随時対応型訪問介護看護(令和6年度第1回総評)

平均月別利用者数 19.6人(令和6年3月~令和6年7月現在)(前回20.1人)

平均要介護度 2.69(前回2.95)

ヒルズ入居者比率 56.1%(令和6年7月現在)(前年50.0%)

看護付き 11件(前年度11件)

売上 4,010,000円/月(令和6年4月~6月までの平均:前回3,700,000円/月)

総評

利用者数は平均19.6人の間で昨年より減りましたが、要介護度の高い方が利用されており、売上は安定できています。外部からの依頼は相対的には減少しました。退院直後、状態安定するまでなどスポット的に対応するケースは、この6か月においては障害者を家族にもつ利用者への広がりもみられており、かつ医療依存度の高い利用者への件数は減少しております。医療保険における訪問看護への依頼は減少し、定期巡回としては件数維持でした。介護負担の増大などにおいて、定期巡回の需要度が高まり、幅広く対応できることが、マッチングにつながっていることがわかりました。

また、この6か月で、コロナ感染やクラスター発生はなく、大きな影響を受けることなく経過できています。職員においては、連日感染対策を実施しながらケアに介入し、一人もケア中に感染者を出すことなく実施できました。

今後の方向性としては、利用者数を20人くらいで安定させていきたいです。しかし、数値目標にとらわれず、その方に合ったサービスや制度のご提案もしていき、法人全体だけでなく、地域圏域の事業所へのアプローチもさらに強化してまいります。

傾向としては高齢者支援センター等からの独居・困難事例はご紹介いただいています。退院後、生活ができるか不安な独居の認知症高齢者が慣れるまでの支援、認知機能低下で障害者の息子を介助していた方が介助できなくなってきており、支援を柔軟に組み立てていきたいケース、認知症の糖尿病患者の血糖コントロール維持のためのインスリン投与見守り支援など認知症の利用者増加が目立ちました。

また、最近では医療依存度が高い方の支援が増えており、ご自宅で看取りするケースも令和5年度では35件であり、前回からは8件(3~6月)と減少しております。(令和4年度は43件)でした。(実績計上は訪問看護として算定されているので、定期巡回での実績とはなっていないが、これは一体型の事業所だからこそできる特徴と考えられます。)

自己評価について

★全体として、すべての質問において、「全くできていない」という回答が無くなりました。

質問1:理念については、今年度刷新したということもあり、全員知っている、またはよく知っているであった。しかし、実践できているかとなると、9人はできていないことが多いと回答があった。

質問5:前回より介護・看護の共有機会は改善されているが、もっと必要と感じている職員が2名(介護士、看護師ともに1名)いた。

質問 11～12：未来志向型の計画作成や心身機能の維持、回復の計画作成においては、多くの職員は状態変化についての子後予測に焦点を当てており、自己評価は厳しい結果だった。利用者の状態像として終末期や状態の悪い方も多いことが要因である。リスク分析などは、今年度、介護事故は 0 件であったことから、適切であると考えられる。

質問 13：柔軟な対応については、自己評価が高い結果であった。

質問 17～18：情報提供や説明責任については、7～8 人とできていないことが多いという回答が多かった。より丁寧なアセスメントと、本人が理解した上でのサービス利用という点で十分な説明が必要である。

質問 20：ケアマネジャーとの連携は良くとれていた。

その他は、毎回だが、行政の介護保険事業計画が意識できていないこと、職員による広報周知は弱いと感じている。

→茨城放送でラジオから定期巡回随時対応型訪問介護看護についての情報提供を実施しています。



質問 30：サービスの導入により、利用者等において、在宅生活の継続に対する安心感が得られている、という問いには、全員ができて、ほぼできていると回答があったことは、本サービスの目的達成であると考えます。

出席者からのご意見

●一般住民からすると、介護や福祉の話は理解しづらく、中身も難しい。いずれは世話になるかな、くらいの話だ。施設に入ったり、サービスを使うときは、必ずケアマネが入るの？それはどのくらいまで入るの？

⇒セルフプランという自分で作ることもできるが、ほとんどはケアマネがケアプランを作っている。ケアプランは大きな方向性を示していて、細かい部分は各サービスで利用計画を作ります。訪問看護やリハビリは、医師の指示書も必要になります。

●社会保険だから仕方ないけど、こんなに複雑で繊細に仕事をするのは大変。2040 年に向けて人材不足はどう対応するつもりか？

⇒離職防止のための取組（チームワークの見える化や心理的安全性の向上に関するアプローチ）や講師活動などを通じて求人活動を継続していきます。

●自分の両親が自宅で最期まで過ごしたいと欲していたが、体調が悪化したときに救急車を呼んだ。それによって、希望通りにいかなかった。ゆりかごでは、そのようなときにでも、いろいろ助言はいただけますか？

⇒もちろん大丈夫です。まずは、人生会議ということ事前に可能な限り、行います。そこで、本人の意思を確認します。本人の意思が確認できない場合は、ご家族に本人の意思を推定してもらったりします。そこで、その時点でのお気持ちを確認します。しかし、時間がたつと気持ちが変わることもあります。ですので、救急車を呼びたいといわれた時も、改めてこちらから意向の確認をしながら、本人や家族の選択を尊重します。

⇒それは安心ですね。

⇒もし、人生会議とか、救急車を呼ぶということはどういうことになるなど、事前に知っておくといいなと思うのであれば、飯富地区で北部高齢者支援センターによる人生会議についてのお話会も開催されますので、ご参加されると良いと思います。

●水戸市としては、介護予防の普及啓発に努めてきました。少しでも元気な状態を長く続けていけるように、引き続き事業や活動へのご協力をお願いしたい。

⇒介護保険利用に至るまでに自然に緩やかに低下していく人もいれば、急に低下してしまう人もいます。介護保険を利用しないと、何か特典があるようなことはないの？

⇒現在は特にはないです。

⇒介護状態にならなければ、ご褒美がもらえるとかだと、がんばろうって思う人はいっぱい増えるのかなと思う。

●様々な組織がもっと視野を広めるべき。例えば、子ども会だが、水戸市内に33小学校区があるが、現在18校区にしか子ども会は無くなってしまった。来年は15小学校区になることが確定しており、加入率も10%前後となる。これは、子ども会の役割として、子どもの育成にだけ目を向けた結果だと思う。加入することが子どもにとってメリットが無い、習い事のほうの方が大切、ゲームで離れた友達ともコミュニケーションはとれるなど、子どもを取り巻く環境が変わってきたことで、地域単位での子ども同士の活動の重要性が変化している。しかし、子ども会には、同年代の親同士のつながりという役割もあたはずだ。結婚して今までと違う地域に来た人にとっては、そこでの住民との出会いが非常に貴重な機会になっていたと思う。そのような部分に目を向けないことで、どんどん減っている。介護や福祉も、主となる事業に目を向けることも大切だが、視野を広く持つことが組織を生き残らせていくために重要ではないか。

⇒おっしゃる通りだと思う。今年度から地域のいいとみ祭りへの参加、今までやっていた高齢者の集いへの送迎協力や健康体操実演など、地域の声を活かしながら、会社ができること、地域に還元できることを推進していきたい。

⇒回覧板も、情報提供という役割だけではなく、安否確認という意味もある。町内会も減ってきて、加入

率が減ると、町内会でやっていたことを、行政が担うようになる。それは結果として住民税の値上げになったりするので、やれることを、無理なく協力し合い、地域を支えるということは、結果自分のためにもなると思う。

上記のように様々な意見が出されました。

地域包括ケアシステムがうたわれて久しいですが、地域コミュニティの衰退は、様々な自治体の共通の課題であり、飯富地区の強みは、災害対策を軸とした強固なコミュニティが存続していることだと考えます。ゆりかごとして、地域活動に参加することが、地域活動の活性化につながると考え、地域の人たちの声を、少しでも運営に活かしていけるようにしてまいります。